

植村達男 神戸の本棚



紀田 順一郎

この書物は、古い洋館や六甲の山なみが見える窓辺に、何気なく置かれるということが最もよく似合うであろう。あるかなきかの微風が、カーテンをそよがせる。

……風がやはり時代の風である点を、私は最も評価したいと思う。(序文より)

勁草書房発売

神戸の本棚



植村達男

植村達男（うえむら たつお）

1941年 神奈川県鎌倉市に生まれる

1964年 神戸大学経済学部卒業

現在 住友海上火災保険(株)

自動車業務部次長兼業務第一課長

著書 『本のある風景』（勤草出版サービスセンター，1978年）

住所 東京都世田谷区代田 4-2-17

神戸の本棚

1986年10月25日 第1刷発行

©著者 植村達男

発行者 井村寿二

発行所 株式会社 勤草出版サービスセンター

〒150東京都渋谷区道玄坂2-16-3 電話03(476)5464

発売所 株式会社 勤草書房

〒112東京都文京区後楽2-13-15 電話03(814)6861

振替・東京5-175253

* 乱丁本・落丁本はお取り替え致します。 根田印刷・和田製本

* 定価はカバーに表示してあります。

* 無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN 4-326-93075-6

窓からの微風

紀田 順一郎

八年まえ、『本のある風景』という、透明感あふれる書物随筆を世におくった植村達男さんが、久方ぶりの新著を上梓するという。乞われて、役不足ながら序文を書くことになった。

ドストエーフスキーの『貧しき人々』には、息子をうしなった老人が、泣きさけびながら柩のあとを追う場面がある。息子の愛読書を外套のポケットというポケットに押しこみ、針のように冷たい霰に打たれながら、一生懸命に跡を追う。本がひっきりなしに泥濘に落ちる。呼び止めて教えてくれる者があると、彼はそれを拾いあげて、またもや柩を追う。

こうした場面を読んだとき、落ちた本にじっと思いを凝らすのが愛書家であり、息せき切って老人といっしょに駆けていってしまうのが読書家である。かねてからそう思ってたし、いまでも大部分の本好きは画然とこの二つのタイプに分類し得ると考える。

それはそれでよいのだが、植村さんは愛書家と読書家それぞれの資質を両つながら兼ねそなえた稀な人であると思う。うっすらと記憶に残る街で、ふと立ち寄った小さな古書肆。そこで出会った、たとえば植村さんの愛する神戸由縁ゆかりの書物。見返しに記された前所蔵者のサイン。思いはやがて、そのかみの神戸の佇いや懐かしき人々のうえにおよぶ。現代の喧騒のなかに、一瞬古い石畳と街路燈の面影が遙曳する心地よい呼吸は、メインストリートから一步入った静かな店で、午後三時に一人味わり珈琲の香りに喩えるべきであろうか。けれどもこの書物は、古い洋館や六甲の山なみが見える窓辺に、何気なく置かれるということが最もよく似合うであろう。あるかなきかの微風が、カーテンをそよがせる。

……風がやはり時代の風である点を、私は最も評価したいと思う。

目次

窓からの微風 紀田順一郎

神戸の本棚

小説『新雪』と六甲

三人の女流作家

割れた魔法瓶——甲陽学院と『天の夕顔』——

六甲山から街をみると

中山伊知郎と野坂昭如

『愛書異聞』という本

「六甲ガーデン」と「ガーデン六甲」

大岡昇平の本

陳舜臣の文庫本・新書

啄木と神戸を結ぶ一冊の本

不思議な小説『風の歌を聴け』

3

6

10

14

18

21

25

28

31

35

39

42

堀辰雄と竹中郁

47

挿絵さがし

——『夢喰ふ蟲』小出檐重を追い続ける——

52

『細雪』から「エマヌエル夫人」迄

55

『猫と庄造と二人のをんな』と摩耶・六甲

59

高島達四郎『白チューブの魅惑』から

62

谷崎潤一郎 住吉反高林旧宅

67

久々の谷崎伝『仮面の谷崎潤一郎』

71

港恋し

74

歌謡曲「港が見える丘」と横浜の

「港の見える丘公園」

76

港町の小説『ジェームス山の李蘭』

79

獅子文六『バナナ』の神戸

82

松井敬子『いっぴきの蟻』のこと

旅と活字

神戸と「ガイジン」

六甲会館をめぐる

二人のエスペランティストを偲んで

古本をめぐる

偕成社の偉人伝

貴志康一のこと

懐かしのメロデー

あとがき

初出誌一覧

装丁 伏見 康子

86 90 96 100 105 109 112 115 117

神戸の本棚

神戸の本棚

本棚の一番上のガラス・ケース一段に神戸に関係のある本が並んでいる。これぞまさしく私が昭和三十年八月から昭和三十九年三月まで、御影・六甲あたりに住んでいたことの証左である。

これらの本の中には田宮虎彦・小松益喜『神戸 我が幼き日の……』（昭和三十四年・中外書房）や朝日新聞神戸支局編『ミナト神戸』（昭和三十七年・神戸国際観光協会）の如く、私が神戸に住んでいる間に求めたものも多い。しかし一方、神戸を離れてから都内の書店や古本屋で買ったもの、神戸に旅した際に市内でみつけたものも多い。

『ユーハイム物語』（昭和三十九年・株式会社ユーハイム）は、昭和四十五年ごろに広尾（渋谷区）の小さな古本屋の店頭で廉価本の中からみつけたものである。この本の存在は新聞のベタ記事で知っていた。ユーハイムが創業五〇年にちなんで作成したもので、あとがき

には「社史」という定義もされており、非売品である。神戸ゆかりの西洋菓子店に関心があった私にとって、この本はまさに掘出物である。

この本を見つけたのは秋晴れの日曜日の午後のことである。渋谷近くに住んでいた私は、昭和三十五年ごろたった一度だけ入ったことのある喫茶店「グリム」にもう一度行こうとして広尾へ行った。くだんの喫茶店はすでにまったくあとかたがなかったが、日赤中央病院から聖心女子大学へ向っている道をだらだら下った坂の下の本屋で、この本を見つけた。たった一度だけ入った感じの良かった喫茶店の「おみちびき」とでもいおうか。

この本の一二六ページに六甲ゆかりの叙述がある。

いったんドイツに帰国したエリーゼ夫人を再び会社にむかえようとしていたころのこと、神戸大学の山下勝治教授がドイツ留学するというニュースを六甲の喫茶店「エクラン」のマダムから聞いて、ユーハイムの平川社長が山下教授にエリーゼ夫人を説得するよう依頼した。山下教授は最初は二の足を踏んだが、結局この美しい話にうたれ「よろしい。できるだけやってみよう。」と引き受けたとのことである。これは昭和二十七年ごろのことで、まだ海外旅行ままならぬ時代のことである。戦前からあった「エクラン」が現在でも同じ場所にあるのは、阪急六甲駅付近の変貌が大きいだけに嬉しく思っている。

もう一冊神戸の本を紹介しよう。創元社編集部編『神戸味覚地図』（昭和三十八年・創元社）である。このシリーズは現在でも出版されているが、味覚地図という本の性格から随時改訂されている。値段が書き直されるだけでなく、収録される店も差し替えられる。

この本の最初の店はベンガルである。六甲登山口からまっすぐ北へ登って行って六甲団地や神戸大学への登り口のところに、この店はあった。住所は灘区水車新田六一とある。同じ経営者が神戸のどこかで再び店を開いているかは確かめてないが、『神戸味覚地図』から外されて久しいことを考慮すると、私がベンガルのカレーやキャベツの漬物を再び味わうことはできないであろう。数年前、府中（この町は競馬場があることで知られている）の古本屋で百円で買った『神戸味覚地図』のベンガルの項を読むと、往時を思い出して口の中に唾液がたまってくる。

小説『新雪』と六甲

藤沢桓夫の小説『新雪』は昭和十六年、朝日新聞に連載された。この小説の舞台は終始、六甲駅付近である。ところが、作者は戦争への暗い影という時局や、それに対比させた藁和田良太（若い国民学校教師）と、彼をとりまく明るく生きる人々を描写するのに傾いたためか、文学散歩的興味を惹くようなことを、あまり書いていない。

『新雪』というと、世間的には歌謡曲の方が良く知られているかも知れない。この曲は小説が映画化されたときの主題歌なのである。

紫けむる 新雪の

峰ふり仰ぐ この心

麓の丘の 小草を敷けば

草の青さが めにしみる

汚れを知らぬ 新雪の

素肌へ匂う 朝の陽よ

若い人生に 幸あれかしと

祈る臉に 湧く涙

大地を踏んで がっかりと

未来に続く 尾根伝い

新雪光る あの峰越えて

行こよ元気で 若人よ

(日本音楽著作権協会(出) 許諾第 8661013 601号)

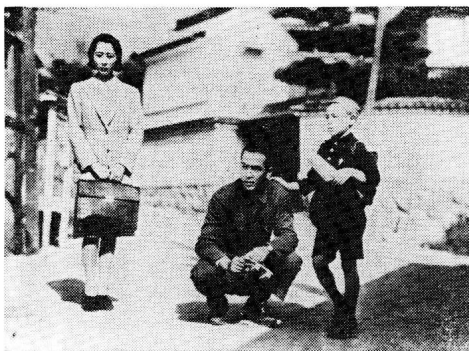
ところで、この歌からも六甲山に積もった新雪というイメージはなぜか湧いてこない。
作詞者佐伯孝夫は、実際に六甲の地を踏んでこの詩を作ったのだろうか。

昭和四十一年のこと。日本テレビ（読売系）が『新雪』をテレビ・ドラマとして放映した。確か小林千登勢が主演女優の一人であった。第一回目を見て私は啞然とした。時代が現代（すなわち昭和四十一年）になっているばかりか、場所が鎌倉になっていて、大仏さんの顔がたびたび出て来るのである。私は早速ペンをとり「いいかげんなドラマ化はやるな！」という趣旨の投書を毎日新聞へ出したところ採用された。これが読売新聞だったら、決して掲載されなかっただろう。

以上のような経緯でもわかるように、『新雪』が文学散歩や文学風土記の中に収録されるケースは少ない。同じ雪のつく小説でも『細雪』とは大ちがいである。手元にある『文学のふるさと——神戸とその周辺』（昭和五十一年・明治書院）や、『六甲山系』（昭和三十八年・中外書房）の文学の項にも『新雪』は見当らない。

この小説の最初の部分に六甲駅付近の描写が少しある。養和田良太が夜十時ごろ電車を降り、空腹を感じ「ふと見ると、駅前に怪しげな串カツ屋が一軒薄汚い屋台を出している。」ので、そこへ飛びこんだ。そのところを、同じ電車から降りた若い女医の片山千代に目撃されるという場面である。

私は『新雪』を二冊持っている。一冊は昭和三十二年初版で同三十六年版の角川文庫



映画『新雪』から
(財団法人 川喜多記念映画文化財団提供)

(九一―二)である。現社長の経営方針でそうなったかどうかは知らないが、この文庫本は現在絶版である。もう一冊は数年前明大前駅(世田谷区)付近の小さな古本屋で見つけた新潮社の初版本(昭和十七年)である。戦時中の出版ながら二五、〇〇〇部発行されているところを見ると、当時の人気がしのばれる。この本には田村孝之介の挿絵が数枚入っているが、これらを見ても当時の風俗(服装や室内のようす)としては興味はあっても風土として関心をひくものは無い。

思うに、この小説はたまたま舞台を六甲付近に設定したもので、別に豊中でも須磨でもよかったのである。そこで、歌・テレビ・挿絵等にも六甲のイメージが湧きでてこないであろう。しかし、「紫けむる 新雪の」という灰田勝彦の歌を聞いて、「ああ、あれは六甲ゆかりの歌だ。」と思う人が少ないのは淋しいことである。